

平和の想い

那覇市立天久小学校六年 知念 由依

「かつて琉球の先人は 平和をこよなく愛する民として海を渡り アジア諸国と交易を結んだ 海は豊かな生命の源として 平和と友好の掛け橋として いまもなお人々の心に息づいている」総合の学習で学んだ万国津梁の鐘。この言葉から先人達が平和をこよなく愛し、世界をつなぐ掛け橋として、海を越え世界と友好な関係を築いていたことを誇らしく感じた。しかし、そんな平和の掛け橋がどうして戦争で壊されてしまったのだろうか。

そこで私は、『対馬丸平和継承プログラム』に参加して沖縄戦で起きた、対馬丸事件について学ぶことにした。はじめに、対馬丸生存者の高良さんから直接話を聞くことができた。高良さんは、家族十一人で対馬丸に乗り、九人もの父母兄妹を亡くした。当時四歳だった高良さんは、お父さんに、抱きかかえられ、荒波の中を三日三晩海の上でさまよった。

「お父さんは、自分の命をかけてぼくを助けて、力尽きたように、海の底へ沈んでいってしまった。」

私は、「未来を生きて欲しい」そんなお父さんの強い想いを感じた。高良さんの目からは涙がこぼれた。八十年たってもいえない心の傷。それでも話してくれた高良さん。「同じ悲しみを二度と繰り返してほしくない。」という温かい想い。その想いを受けて、「平和を守るために一歩踏み出そう」と誓った。

八月十三日、私は対馬丸に乗った人達と同じ場所へ向かうために船に乗った。十三時間もかかる長い船旅。船の中を探検したり友達とおしゃべりしたりと、最初はワクワクして胸が躍った。しかし、時が経つと家族の顔が思い浮かび、心細くなってきた。対馬丸に乗った子ども達も同じように家族を想ったのだろうか。徳之島沖では、海上慰霊祭をした。

「この海には、今も対馬丸とその犠牲者が沈んでいます。」

そう聞いて海をながめると、胸が張り裂けそうだった。戦争は子ども達の未来をうばった。多くの生きたかった命が今もこの海に眠っている。この静かな海に誓う。戦争をもう二度と繰り返さないと。

日はどんどんかたむいていく。私は、対馬丸に乗った子ども達のことを想った。狭い船室に多くの人が入ったのだ。船のゆれやにおいで息苦しかったかもしれない。おなかを空かしていたのだろうか。夜、甲板に出てみた。湿った風が顔に当たる。海をのぞくと真っ暗で海面さえも見えなくなっていた。漆黒の海を初めてみた。子ども達の命の光さえ簡単にのみこんでしまった海。魚雷に爆撃された後、子ども達は、パニックになったに違いない。波の音に混ざり叫び声が聞こえてくるような気がした。絶望を感じた。

奄美大島に着き、船越海岸に向かった。対馬丸撃沈から一週間近く経った朝、ここには、数少ない生存者と多くの遺体が流れ着いた。そのため、村中は大騒ぎとなったが、村人達が協力し、水陸両方からの搜索・救助活動が行われた。遺体は一体一体丁寧に埋葬され、生存者は手厚い看護を受けたそうだ。戦時中にも関わらず、見ず知らずの生存者のお世話や腐敗した遺体の埋葬をしてくれた村の人達。「沖縄の人は家族を大切に作るからきつと骨を拾いに来てくれる。」

そう言って、全ての尊い命を大切にしてくれた想い。その想いは家族へと伝わり、今も感謝の気持ちとともに生き続けている。

私はこの平和継承プログラムに参加することで、戦争に巻き込まれてしまった人々の様々な想いに触れることができた。「戦争は二度と繰り返してはならない」「全ての尊い命を大切に」彼らの想いが今を生きる私達の道しるべとなり、未来を明るく照らす。

昔沖縄が琉球だった頃から受けつがれている「万国津梁」の想いを胸に、沖縄から世界へ平和な未来への掛け橋をつくっていききたい。